

最近のコンサルティングで感じたこと 後継者選びの問題

一般財団法人 大阪科学技術センター
ATAC 運営委員長 梶原 孝生

中小企業経営者の皆様は日夜のご苦勞が続いていますが、ATACも全力でその支援を続けています。しかし、その中で常に気になることがあります。

それは、事業承継の問題です。数々の中小企業経営者の方々にお会いしてきました。その殆どの場合が、親子、親族の間での経営承継です。優秀な創業者が息子に経営を引き継ぐものの、どうにも不満があって実質的には引き継いでおらず、何かと口を挟んで息子さんの行動を縛ってしまっているケースがあります。近くはマスコミの騒ぎになってしまった大塚家具の例もあります。これを対岸の火事と見るのではなく、教科書と捉えて欲しいと思います。

勿論、息子さんや、お嬢さんに渡して素晴らしい発展を重ねているケースも多々みられますが、創業者がご自分で選択したにも拘わらず、段々と創業者の意に添わない場面が出てきて二人の間に齟齬を生じてしまっている場合も少なくありません。

いったん選んだ以上は、胃の痛くなる場面に遭遇しても、目を閉じて任せる度量が必要になるでしょう。会社を潰すかどうかの極めて重要な岐路の問題でしょうが、ここで口を出せば後継者の依頼心を育ててしまう大切な分岐点です。

多くの場合、創業者は並々ならぬ苦勞を重ねて

その地盤を築いてきましたから、息子なり婿なりに多くの期待を生んでしまいがちです。後継者には後継者としての想い、信念、理想というものがあるでしょうから、ここは思い切って任せることが重要でしょう。食事の時に異物を嚙んでしまっても、舌でよりわけて異物を吐き出すのではなく、目をつぶって口の中の異物を飲み込んでしまう度量が求められます。

一方、後継者は、限りなく先輩を敬い、その思いを徹底的に聞き取り、また、自分の思いを徹底的に理解して貰う努力が必要になります。

色々な場合を感じるのは、やはり相互のコミュニケーション不足です。そこから生まれる感情が相互不信を生んでいるケースをよく見かけます。なんとかお互いを尊重し、お互いを認め合うことを努力して欲しいと感じることが多々見受けられます。

創業者が亡くなられ、後を継いだ後継者の方がご苦勞をされているケースも多々見受けられます。従業員はかつての創業者に見込まれて育ってきていますから、どうしても創業者の姿を思い浮かべてしまいます。後継者が苦勞するのはこの点です。

個人的にいつでも相談にのりますので、ご遠慮なくお声をかけて下さい。